

審査の結果の要旨

氏名 ホリタ・ファン・カルロス

大震害の後の復興プロセスに、被災地の居住者が参加することが、何らかの好影響を与えるということは従前から多くの識者が指摘してきた。しかしながら、その指摘は、居住者参加は無条件に良いことという暗黙の先験的前提にたっているものであったり、あるいは個別のケースにおける体験的分析に基づくものであった。そのため、どのような居住者参加の組織・マネジメントプロセスを構築・運用すれば、どのように復興プロセスのパフォーマンスを向上させることができるのか、一般的知見が体系化されてこなかった。本論文は、このような知見の散在状況を改善し、より有効な復興プロセスへの居住者参加を実現していくための、体系的知見をとりまとめることを目的としたものである。具体的には、本論文は、過去の震害の復興プロセスにおける居住者参加に関する既往のケーススタディを分析したうえで、1985年のメキシコ地震の被災地であるメキシコシティ Cuauhtemoc 地区、1999年の台湾地震の被災地である Seshui village、及び2007年能登半島地震の被災地である輪島市、及び穴水町で、文献資料収集、関係者への聞き取りを含む現地調査を行い、以下のことがらを明らかにしようと試みている。

1 居住者参加は復興プロセスに何らかの影響を与えているのか

2 参加様態の如何なる要素が、復興プロセスのパフォーマンスに、どのように関わっているのか

具体的には、本論文は、参加様態の特徴として、計画推進者、復興計画主体、コミュニティ組織の熟度（特に参加にかかわる経験度）、組織間連携、リーダーの存在の有無及びその能力、外部専門家の存在及びその能力、参加者への啓発方法、適用されたツールの機能・内容、プロセスに関与した主体・個人の範囲、参加者間の発言力の勾配の有無、予算などの要素をあげて、ケーススタディ対象を分析している。

次に、本論文は、復興プロセスのパフォーマンスを、復興スケジュールへの適合性、コスト、復興された住宅・インフラなど品質、要求条件の適合性、参加者間の融和性及び居住者の満足度として整理している。そのうえで、参加の仕組みと復興プロセスのパフォーマンスの関係、参加プロセスと復興プロセスのパフォーマンスの関係、意志決定への関与度合いと復興プロセスのパフォーマンスの関係について、現地調査を行ったケース、及び文献調査によってデータを得たケースを比較しつつ分析をしている。

そのうえで、これらの参加様態の各要素と、復興プロセスのパフォーマンスの相互関係について分析マトリックスを作成し、上記の現地調査4地点で得られた知見を、この分析マトリックスに記入し、これにより、参加様態の如何なる要素が、復興プロセスのパフォーマンスにどのように関わっているのかについて俯瞰的にとらえようと試みている。

この分析マトリックスからは次のような知見や推論が導きだされている。まず、全般的に居住者参加による、要求条件の適合性、参加者間の融和性、居住者の満足度にかかわるパフォーマンスの向上度は、復興スケジュールへの適合性、コスト、復興された住宅・インフラなど品質にかかわる向上度も高くあらわれている。また、参加様態にかかわる要素のうち、意志決定への関与度合い及びその方法が、参加の仕組み・構造や、参加プロセスよりも、要求条件の適合性、参加者間の融和性、居住者の満足度に大きな影響を与えていることも明らかにしている。

以上のような手順によって、本論文は、震害後の復興プロセスについて、いくつかのインジケータを設定して分析し、相互比較することによって、既往研究で示されてきた知見のいくつかを確認するとともに、新しい知見を生みだしているとともに、これらの知見を体系化することに寄与している。本論文で得られた知識は、学術的価値をもつばかりでなく、震害後の復興プロセスにおける居住者参加をどのようにすればよいのか実務的示唆も与えている。

よって、その学術的意義の高さと、社会的意義に鑑みて、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。